

2022 学年度教育省華語文奨学金
留学報告書

氏名：古川優子

1. 期間・留学先

2022年8月～2023年2月：国立台湾大学 文学部中国語センター中国語グループ
2023年3月～2023年8月：国立台湾師範大学 国語教学センター

2. 留学までの経緯と準備

何度かの台湾訪問を経て「台日の双方へ文化を伝え合うパイプ役になりたい」との思いから、仕事と学習の両立を目標に、週に一度華語文の教室に通い基礎を学んだ。さらに集中的に勉強したいと思い、台湾の華語文センターで学ぶため奨学金を志望するに至った。

3. 留学の成果

(1) 学業

語学学校の授業や課題に積極的に取り組んだ。授業以外には大学や地域の図書館で勉強をし、言語交換のパートナーと週に3回以上の言語交換を行なった。テレビやインターネット上の動画等を通して単語や聴解の練習に取り組んだ結果、華語文能力試験（TOCFL）を初めて受験し高階級を取得することができた。

また最終学期の2023年8月には台湾師範大学内で行われるスピーチコンテストに参加し、およそ7分間のスピーチに挑戦した。

(2) 生活を通して学んだ台湾文化

日本では経験できないことを積極的に行うこと、生活を通して台湾の方々と触れ合い、必要な言葉や習慣を学ぶことを心がけ、最低限華語文で生活できる能力を身に付けられたと感じている。

住居や携帯電話の契約、買い物や食事、時には映画館に行って華語文の映画を観たり、休暇を利用して初めて台湾南部や東部を訪れたりもした。

また、台湾語や書道の授業などを通して台湾の文化や社会を体感することができた。

4. 留学生活

渡台時は新型コロナウイルスの影響で、一週間のホテル隔離を経たのちに住居の契約か

ら留学生活が始まった。

台湾大学の語学センターは、少人数制のクラスで、授業以外でも校内では華語文を話すことが徹底されているなど先生も学生も熱心であり、集中して勉強できる環境だと感じた。

私には「聞く・話す・読む・書く」の技能のうち「話す」が特に難しく、一学期目では、読み書きの技能と比較して口頭試験がほとんどできない状況が続いた。「聞く」に関しては半年程経過した頃、少しずつ聞き取れる感触があったものの、「話す」に関してはなかなか上達を感じられず、現在も力を入れて取り組んでいる。

そのような状況であったため、二学期目では先生方にも相談のうえ、いくつか授業を見学してクラス変更を申請した。この時、上級クラスにいくほどクラスの選択肢が少なく感じて悩んだ。そして、三学期目からは国立台湾師範大学に転校することを決めた。

国立台湾師範大学の国語教学センターは台湾大学の中国語センターと比べて規模が大きく、校内はいつも賑やかな雰囲気絶えなかったが、先生も学生も熱心なのは変わらず、引き続き集中して勉強することができた。加えて台湾語や書道等の文化クラスもあり、より多くの学生と交流することもでき、結果として転校は良い経験だったと感じている。

留学中の学習を通じて、話すことは頭で考えること以上に身体で習得することが重要だと感じ、沢山話し、誰かに修正してもらってまた話す、という反復を心がけた。練習にはネイティブの方と会話するのが一番だが、人間関係のストレスやトラブルから学習を思うように進められないこともあった。また、教科書の内容がどんどん難しくなる反面、日常生活の簡単なコミュニケーションに躓き、自信を無くすこともしばしばあった。

そのように目標を見失いそうになった時は、奨学金申請時に作成した学習計画書を見返し、初心に戻ることを心掛けた。そして話すことに関する苦手意識を少しでも克服したいという思いから、最終学期には学内のスピーチコンテストに挑戦した。何度も同じ原稿を練習し、初めて聴衆の前で華語文のスピーチをしたことは貴重であり、また、審査員の先生からお褒めの言葉と今後のアドバイスを頂いたことも嬉しい経験だった。

5. 印象に残ったこと

台湾でできた良い経験の一つとして、華語文の出版物に多く触れられたことがある。

読書が趣味で、日本在住時から書店や図書館を巡って観察することが好きだったため、台湾でもできる限り多くの場所を巡った。

印象的だったのは、台北市立図書館に利用者登録に行った際、利用者カードというものがなく、すべてスマートフォンのアプリで操作できると説明されたことだ。日本では利用者カードが必須の環境だったので、台湾はデジタル社会であることを改めて実感した。

新北市立図書館や国立台湾図書館では、交通系カードである悠遊カードを図書カードとしても利用できること、また新北市については、感染症拡大以前には二十四時間開館していたこと等も知り、日本の図書館よりも利便性を感じることも多くあった。

桃園市・高雄市・台南市・屏東市の市立図書館、台中市の国立公共情報図書館・私立李科永紀念図書館などへも足を運んだ。台南では図書館内に書店があることを不思議に感じたが、台湾の書店を紹介する書籍で（『島讀臺灣』方舟文化、2022年）図書館で人気書が借りられない場合に需要があるという記述を読み、台湾の方の強いチャレンジ精神を感じた。

2023年2月に開館した桃園市立図書館は、観光スポットの役割も担い、一階にはレストラン等の商業施設がひしめいており、次世代の図書館の在り方について考えさせられた。

また、ある書籍で複数の台湾の書店経営者の方々が日本人作家の向田邦子さんの小説に触れていたことから、台日友好協会の図書室で向田さんの日本語の本を探した。

一年間を通じて台湾の各図書館の利便性や特性、外国人の自分でもとても身近に利用できることを実感し、日本も習うべきところも多いと感じた。

そして、学校では自分と同じように社会人経験を経て留学した同年代の学生も想像以上に多く、各国の同級生と悩みを共有し励ましあったことが大きな心の支えになった。共通言語が華語文だけの環境で交流できたことは自信にもつながり、人生において貴重な財産だと感じている。彼らと再会した際に、よりスムーズに華語文で対話できたら、これほど嬉しいことはない。その気持ちを忘れずに今後も華語文を学び続けていきたい。

6. 今後の展望

(1) 職業について

日本語教師の資格を取得し、台湾をはじめとする多くの国の方に日本語を伝えていきたいと考えている。

理由として、留学前・留学中に台湾出身の華語文の先生方に大変お世話になり、個人的にそれぞれの価値観について話をさせていただく機会もあり、影響を受けたことが挙げられる。また、留学中は日本よりも外食文化のある台湾で、技術やノウハウを生かしてお店を経営する経営者の方を身近に感じる機会も多かった。

そのような環境で、生徒やお客としてではなく、一人の人として正面から向き合ってくださった姿勢や、組織の力に頼るのではない個人として働く強さにも感銘を受けた。

様々な可能性を模索し、まずは日本で日本語教師となり、技術を磨きたいと考える。

(2) 職業以外について

- ・華語文の学習を続け、華語文能力試験（TOCFL）流利級までの取得を目標とする。
これまで学んだ華語文も生かし日本語教育に携わる。
- ・外国籍の方に向けた、日本語を教えるボランティア活動に参加する。
- ・興味・関心のある図書館や書籍に関する仕事やボランティアにも挑戦する。

以上